

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続

— 教科活動につながる協同的な遊びと学びについて考える —

山田 千明¹⁾ 清水 亜紀²⁾ 相原 佑美³⁾

要 旨

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のためには、教科活動につながる幼児期の協同的な遊びと学びの内容の検討が必要だと考え、山梨県の私立 A 幼稚園における「共有した体験から協同的活動へ～天体への関心の高まりから」および「オリジナル鬼ごっこで遊ぶまで～5歳児の協同的な遊びと学び～」の活動を取りあげた。協同的活動から学びの自立へ、そして精神的な自立へとつながっていく過程を分析したところ、「遊び」を通した幼児期の学びを小学校以降の教科等を中心とした学習につなげるには、子どもの中から発せられた「やりたい」という気持ちやつぶやき、また、知的好奇心や探究心を教師が即座に受け止め、実現の方向を探ることが重要性であり、集団の育ちと個人の育ちの相互作用によって子どもたちが育つためには、教師の援助・環境構成が重要であることが見い出された。

キーワード：幼小連携 協同的な遊びと学び 知的好奇心 探究心

はじめに

子どもの発達には連続しているにも関わらず、幼稚園や保育所と小学校の教育（保育）課程は異なり、小学校入学時における子どものとまどいは非常に大きい。小学校段階だけ、あるいは、幼稚園・保育所・認定こども園段階だけしか考慮しない教育（保育）課程の編成・実施では、一人一人の成長発達における円滑なアーティキュレーション、すなわち「人間形成における学びの連続性」の保障はできない。そこで、「児童期における教育の内容の深さや広がりをも十分に理解」し、「今の学びがどのように育っていくのか見通した教育課程」を編成・実施する幼稚園・保育所・認定こども園の教育、「幼児期における教育の内容の深さや広がりをも十分に理解」し、「今の学習がどのように育ってきたのか見通した教育課程」⁽¹⁾を編成・実施する小学校教育（下線は引用者による）が強く求

められることになる。

近年、幼稚園教育の研修等で「協同的な遊びと学び」を研究主題とする機会も多く、林幸恵（2009）⁽²⁾等、その実践報告や、小林功ら（2005）⁽³⁾等「協同的な活動」を模索する研究は数多くあるが、本研究の特徴は、上記の内容を踏まえ、「協同的な活動」を教科活動につながる遊びと学びとして位置づけていることにある。具体的には山梨県の私立 A 幼稚園における保育活動を分析し、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続をめざした教育という視点から、協同的な遊びと学びについて考察する。

1. 幼稚園教育の特性

幼稚園教育の特性をみるため、「幼稚園と小学校の連携について」の座談会（2009年2月20日）⁽⁴⁾の記述から、小学校の教師が感じた幼稚園教育に

（所 属）

1）山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

2）山梨県私立塩部幼稚園

3）山梨県私立塩部幼稚園

ついて、抜き出してみよう。

「子どもの行動や内面に寄り添う幼稚園教育のきめ細かさに驚きました。……幼稚園では、『遊びを通して学んでいる』という言葉は知っていましたが、実際に幼稚園で何をすればよいのかあまりイメージがわきませんでした。子どもと一緒に遊んでいれば、自然と子どもは成長していくのかななどと漠然と思っていました。しかし、実際に幼稚園へ行ってみると全然違いました。ただ遊んでいるだけだと思っていましたが、その遊びに教師がいろいろな願いをこめていることにびっくりしました。そして、なによりも、幼稚園の先生は、子どもの様子をよくみており、表面に表れた行動だけでなく、子どもの内面や心の動きまで理解されていることに驚きました。その子どもは今何に興味があるのかなど、その時々の子どもの実態に応じてきめ細かく遊びの計画を立てていました。」「この遊びが、私が思っていたようないわゆる『遊び』ではないのです。ただ鬼ごっこをして遊んでいるだけに見えても、他の子どもとかかわることを楽しむなど、遊びの中に学習のねらいがあるのです。どの遊びをとってみても、ただ単に楽しければそれだけでよいというわけではないのです。年少さんと年長さんでは遊びから学ぶことが違うと言われても、頭では何となくわかるのですが、実際にどうしたらいいのかということになるとずいぶん悩みました。さらに、遊びが見つからない子が遊びを見つけることができるようになるにはどうしたらいいのかなど、考えなくてはいけないことがたくさんありました。例えば、ある子に他の子どもともっとかかわってほしいという願いをもっていたとします。この子はものをつくるのが大好きなので、まずはお店屋さんごっこの品物を他の子どもと一緒につくっていくことを大切にします。今はつくることで満足しているけれど、次第に他の子どもとかかわりを深めていけるといいよねというように、長期的な見通しをもっていかないといけません。」「一人一人を理解することの大切さを知りました。幼稚園では、子ども一人一人についてしっかりと理解し、その上で子どもが思わずやってみたくなるような準備がどのくらい

できるのかがより良い教育へとつながるかどうかの境目でした。そうした生活を送る中で、これらがよく幼稚園の先生方から言われていた『幼児理解』と『環境の構成』だということに気がしました。この『幼児理解』の奥が深いのです。幼稚園の先生方は子どもをみると、『単に鬼ごっこをしている』とみるのではなく、鬼ごっこで遊んでいる子どもの様子から何を読み取るのかという見方をされます。』

生駒市立幼稚園（奈良県）の三石教諭⁽⁵⁾も、3歳児、4歳児の生活や遊びの中で様々な経験の積み重ねが「協同的な学び」の場面で大いに反映されると述べ、子どもたちが指導者や友達などとかかわりながら安心して自分の思いを出せるようになることや喜びや楽しさを共有すること、ぶつかり合ったり考えたりする経験を通して相手を受け入れられるようになることの積み重ねが大切だという。三石教諭は3歳で経験しておきたいこととして、「身近にある興味をもつ遊具や玩具で遊ぶ」、「指導者や友達に声をかける」、「友達のイメージを感じることができる」、「同じ場にいる友達との遊びを楽しむ」ことを挙げ、また、4歳児については、「自分の思いを相手に言葉で伝える」、「友達と一緒に遊ぶと一人で遊ぶよりも楽しいという経験」を挙げている。

このような3・4歳児での経験の積み重ねの上に5歳児の「協同的な学び」が充実してくるのである。そこで本稿では、幼稚園教育の特徴を「遊びは幼児期にふさわしい学び」ならびに「協同的な学び」という側面から捉え、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続をめざした教育を考える。

2. A 幼稚園の実践

(1) 活動の概要

中央教育審議会答申（2005）⁽⁶⁾では、次のように幼児期から児童期への教育の流れを意識した幼児教育の内容や方法の充実の必要性について言及している。

遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行を目指

し、幼稚園等施設と小学校との連携を強化する。

幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を「協同的な学び」として位置付け、その取組を推奨する必要がある。

遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。

そこで、A幼稚園の1)互いに関わり協同して遊ぶことにより、共通の目的が実現する喜びを味わう、2)自発的活動から知的好奇心・探究心を育てる、という目標のもとに展開された活動を取り上げたい。

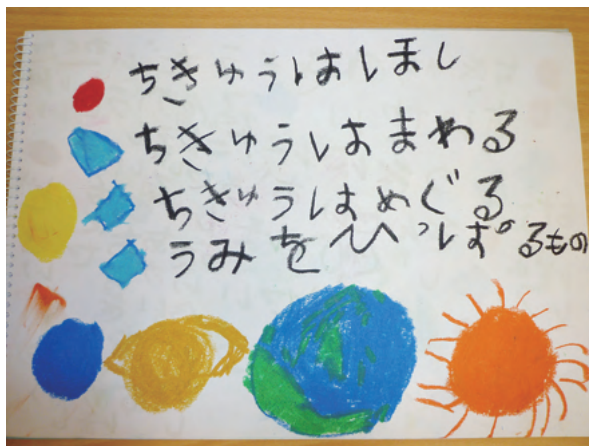
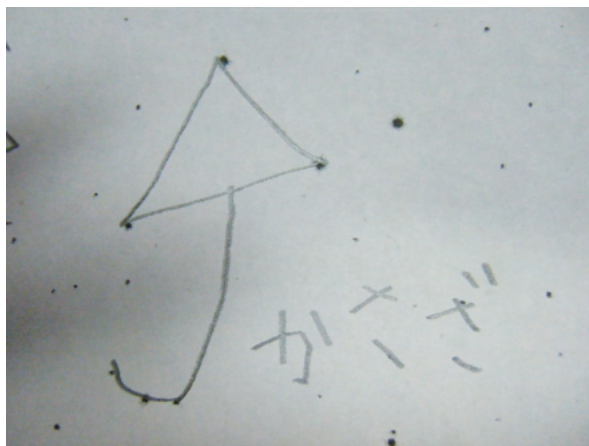


図1 天体への関心を自由に表現



A幼稚園の園児数は約280名(2010年度)で、人口約20万人の都市の市街地に立地し、近隣には高等学校をはじめ、中学校、小学校がある。「子どもはみんな国際人」との考えから、世界や宇宙等について知識を得たり体験したりすることを通して、園児が広い視野をもてるような保育活動を展開している。各保育室には星が好きな園長自らが制作したオリジナルの星座表や星座パズルが設置され、天体に興味をもつ園児が多い。

この活動は、2009年度4歳児クラス、2010年度5歳児クラス27名(進級によるクラス替えがあり、4歳児クラスからの継続は8名)を対象としたものである。

(2) 活動内容

1) 天体への関心

約1年にわたる活動は次のように展開された。

2010年2～3月頃、お誕生日会で星が好きな園長が星座について語ったり、英語教師が世界地図を使った話をしたりして、4歳児クラスの園児たちは宇宙や天体、世界に興味を持ち始めた。5歳児クラスに進級し、園児からのプラネタリウムを見に行きたいという要望を受け、皆でプラネタリウムを見に行った。そのことにより園児たちの星への関心は深まっていく。園児たちが想像する天体がどのようなものなのか興味をもち、園児たちが自由に表現できるように教師は材料を用意したところ、多くが地球や土星、ロケットなどを作る。地球を青や緑で作ったり、土星には輪をつけ

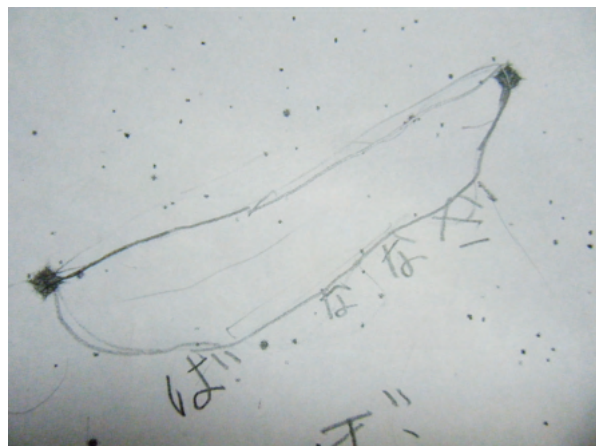


図2 園児が考えるオリジナル星座(傘座、バナナ座)

たり、プラネタリウムや図鑑などから得た知識に基づき表現していた。その中で教師は、園児たちの天体に関する知識や気持ちの高まりを感じ自分たち自身の星座を作ってみたいという会話が聞かれるようになった。そこで、オリジナルの星座をつくり、実際にプラネタリウムで投影してもらう。

6月には、七夕まつりに飾る作品について園児たちが話し合いをして決めることになり、「流れ星」「スペースシャトル」「オリオン座」「金星」「地球」などたくさん候補が出される。どのようにして絞っていくかという過程で「一人一人が作りたいものを作る」「手を挙げて多いものを1つだけつくる」という2つの対立する意見が出る。

教師「2つの意見が出ましたが、どうしたらいいでしょう。」

A児「自分の作りたいものを作りたい。」

B児「嫌だ。大きいものの方がいい。だからみんな流れ星を作りたい。」

C児「みんなで違うものを作ると楽しいと思うよ。」

A児「みんなで違うものを作った方が色とりどりできれいだと思う。」

B児「嫌だ。みんなで同じものを作りたい。」

D児「(大きいもの) 1つだけじゃ、さびしくてかわいそうだよ。」

B児「そっか。じゃあ、自分の作りたいものを作ろう。」

上述のような話し合い結果、「星座」「スペースシャトル」「惑星」の3つのグループに分かれて製作することで全員が合意、グループごとに材料等について話し合い、自分たちで考えて家からペットボトルやトイレットペーパーの芯、トレー等を持ち寄り、製作を開始する。その作品は7月の七夕まつりで飾る。

2) 協同活動から学びの自立へ

「協同的活動によりひとつの作品を作り上げる」経験をした園児たちは、その後、7月に実施したお泊り保育の場面でも、自分たちが寝ていた布団を友だち同士で協力しながらたむという姿が見られる。さらに10月の運動会でマーチングやパラバルーン、組体操など皆で力を合わせて取り組む。11月には、学園祭(作品展)クラスごと絵を描いたり、工作を作ったりする。12月に実施している生活発表会(ブロードウェイ)では、例年教師が劇やダンスの振り付けを考えるのだが、このクラスは、園児の中から劇の中の振り付けの

アイデアが出てきて、皆で考えることになる。

3) オリジナル鬼ごっこ

3学期になり、朝の自由遊びの時間にオリジナルの鬼ごっこを始めていることに教師は気付く。自分たちでルールを考え、園児同士で話し合いをし、仲間を広げ、自分たちだけで遊べるようになっていく。朝の自由遊びの時間の中で、3人の園児が1本の縄跳びで一緒に跳ぶことができるか



図3 自主的・協同的学びとしての製作活動

挑戦。何度か挑戦したが、縄が短く上手く跳ぶことはできなかった。

B児「難しいな。縄跳び短いからだよ。じゃあ、つなげて長くしよう。」

E児「(長くなった縄跳びを見て)これじゃあ、もっと(多くの人が)とべるよ。」

そこで他の友だちを誘い、4人で跳んでみることにした。

A児「4人縄跳びだ。できるかな？」

B児「これ、できないんじゃない？」

E児「ちょっと、息そろえてやるよ。」

何度か挑戦したが、跳ぶことができなかった。翌日も同じメンバーで縄跳びの練習を行ったがなかなか難しく、この日も跳べなかった。この活動は同じメンバーで1週間程続いたが、結局跳べないままだった。

この事例から、たとえ跳ぶことはできなかったとしても、園児たちは自分たちでできない原因を考え、解明しようとする姿勢がみられる。幼児期あるいは小学校低学年の時期は特に「失敗する自由」の保障も重要ではないだろうか。教師はこの期間の活動を見守ってはいたが、あえて何も教えなかった。それは、園児たちが自分たちだけでどのような活動をするのか、またどのように活動が展開していくのか興味があったからでもある。また、この活動の中で友だちと一緒に試行錯誤する姿が見られた。それは、これまで協同で行ってきた製作活動などを通して1人だけではできないこともみんなで力を合わせると素晴らしい作品ができ、協力する楽しさを経験したからではないだろうかと考えられる。

2～3月になると、いろいろな活動をする中で力を合わせることの楽しさを経験してきた園児たちは、朝の自由遊びの時間にクラスの友だちと鬼ごっこをするようになった。一部の園児たちから「こおり鬼」遊びが始まる。鬼にタッチされると凍ってしまうという基本的なルールだった。その後、自分たちでルールを考え、いろいろな鬼ごっこに発展する(表1参照)。

朝の自由遊びの時間に園児7、8人でこおり鬼

がスタート。その後数人が参加して、かまきり鬼ごっこが始まる。捕まった園児はルールに従い、かまきりのような動作をする。だんだん仲間が増えてきたので次の鬼ごっこへと展開する。

F児「いっぱい集まったから、違う鬼ごっこ。ハンターごっこ。ハンターごっこ。」

G児「バナナ鬼ごっこ。バナナ鬼ごっこ。」

H児「ハンター。ハンター。」

D児「バナナがやりたい。」

I児「バナナ鬼しよう。」

J児「いいよ。」

しばらく自分がやりたい鬼ごっこを主張しあう。

I児「じゃあ、バナナ鬼がいい人。」

園児数人「はい。」

F児「ハンターがいい人。」

園児数人「はい。」

I児「じゃあ、対決。バナナの人とハンターの人が対決じゃんけん。バナナの人と、ハンターの人が分かれて。こっちがバナナ。」

バナナとハンターに分かれる。

I児「最初はグーで対決。」

F児「同点同点。人数同じ。」

ここで各チームの代表者がじゃんけんをし、バナナ鬼の園児が勝つ。ハンターの園児たちは納得できず、もう一度バナナとハンターの人数を数えて、同じ人数を確認。新たにF児が来、バナナ鬼の園児たちがF児をバナナ鬼に誘う。

B児「Fちゃんバナナ鬼に入って。」

F児「バナナ鬼ってなに？」

J児がバナナ鬼のルールを説明する。

I児「どっちがいい？」

E児「ハンターだったら1度捕まったら終わりだよ。」

F児「バナナ鬼がいい。」

F児はもう一度J児にバナナ鬼のルールを説明してもらい、バナナ鬼へ入る。

B児「バナナの方が多くなったよ。」

I児「じゃあ、ハンターごっこならハンター。バナナ鬼ならバナナ鬼をしよう。バナナ鬼する人こっち。」

K児「ハンターの人こっち集まって。」

ここで最初はハンターごっこをやりたかった子が、バナナ鬼の方が楽しそうとバナナ鬼に移動し、結局ハンターごっこをしたい園児は4人になる。バナナ鬼をやりたい園児で「おにぎり 15 ジャントップ」をして鬼が1人決まる。

I児「(人数が多くなり、鬼が1人では大変なので)

あと1人(鬼を)決めよう。」

そして、また「おにぎり 15 ジャントップ」をする。F児とI児が鬼となりバナナ鬼ごっこが始まり、知らぬ間にハンターごっこの4人もバナナ鬼ごっこに入っている。翌日も鬼ごっこが行われていたが、鬼を決めるじゃんけんが出した指を40まで数えて決める「おにぎり 40 ラストトップ」に変わっていた。ルールは日々変化する。

4) 協同活動から精神的な自立へ

1学期の段階では、自分たちの意見を主張するだけで、スムーズな話し合いができなかった。教師が入ることも多くあったが、その後何度か話し合いの場を持ったことで、まとめ役の園児が出てくるようになり、少しずつ自分たちだけで話し合いができるようになる。今回の鬼ごっこの話し合いでは、話を進めていく進行役が園児たちの中から出てきたことにより、園児たち同士で話し合いが進むようになった。対立した意見も出るが園児間で解決できるようになる。また、皆がいろいろな意見を言える雰囲気になり、多様な鬼ごっこが展開するようになった。園児たちがひとつの目的を共有したことにより、遊びを継続しながら発展できたと考えられる。

(3) 活動の総括

該当クラスの担任は1年以上にわたるクラス活動を次のように総括する。

- ① 1学期の活動の中で、同じ経験によって空間や時間を共有したことで、友だち同士の天体についての会話が增え、興味・関心もさらに高まり、みんなの気持ちと同じ方向へ向いていった。
- ② 家庭でもインターネットで天体や金星探査機について調べたり、夜空を家族みんなで眺めたり、星の話がきっかけで家族の会話や団欒の時間が増え、嬉しいというお便りがたくさん寄せられた。子どもたちの興味が家庭にも広がり、家族とのコミュニケーションが増えてきている。
- ③ 何度か話し合いの機会を持つことで、自分の意見を出し協力・工夫して物事を進めていく能力が高まっていった。葛藤が生じる時もあったが、他者の思いや考えを理解し、ある部分は友だちの考えを受け入れ、自分の考えと調整しようとしながら、協同的に活動する力が培われた。
- ④ 今回のような活動の中で、園児は他の園児たちと関わりながら集団としての自発性を獲得するのではないかとと思うが、時には教師が意図的に話し合いの場を設けたり、製作活動ができるような環境構成をしたり、援助したりすることにより、園児たちの自発性が育ち、協同的な活動がより充実したものに発展していくのではないかと考えられる。
- ⑤ 遊びの中で、数についての興味・関心や感覚が養われ、それが小学校での学習へと繋がっていくのではないかと。

表1 園児たちが考えた鬼ごっことじゃんけんのルール

鬼ごっこ	ハンターごっこ	テレビ番組『逃走中』に影響され、ハンターが捕まえる鬼ごっこ
	カメ鬼ごっこ	鬼に捕まるとカメになってしまう。カメは甲羅に隠れているように小さくなる。仲間が1回タッチすると、またゲームに参加できる。
	バナナ鬼ごっこ	鬼に捕まるとバナナになってしまう。仲間が2回タッチをすると皮がむけて、またゲームに参加できる。
	かまきり鬼ごっこ	鬼に捕まるとかまきりになってしまう。仲間が1回タッチすると、またゲームに参加できる。
じゃんけん	おにぎり 15 ジャントップ	鬼ごっこの鬼を決めるじゃんけん。両手を使い0本～10本まで任意に指を出す。皆が一斉に出した指の数を数えて15本目の指の子が鬼になるというもの。鬼は帽子の色を白に変える
	おにぎり 40 ラストトップ	鬼ごっこの鬼を決めるじゃんけん。両手を使い0本～10本まで任意に指を出す。皆が一斉に出した指の数を数えて40本目の指の子が鬼になるというもの。鬼は帽子の色を白に変える

- ⑥同じ遊び（こおり鬼）を繰り返し行ってきたことで、さらに楽しもうと自分たちでルールを作ったり、作り変えたりする力が育ったようだ。
- ⑦縄跳びや鬼ごっこなど共通した目的を持ち、それを達成するためにみんなで協力し、工夫や努力をするようになった。この過程の中で自分の考えを伝えたり、新しいアイディアを出したり、自分の役割を考えて行動したり、みんなで力を合わせて協力する喜びを実感したようだ。
- ⑧今回の研究のきっかけは天体への関心だったが、天体に限らずどのような活動でも、皆で同じ話題を共有することにより、様々な活動へ発展し、協同する力を育むことができるのではないだろうか。
- ⑨集団の育ちと個人の育ちが相乗効果をもたらした。クラス全体が個人の意見を大切に受け入れる良い雰囲気ができ、個人も自己を発揮できるようになったのではないだろうか。
- ⑩話し合いや製作活動を通し、いろいろな園児と話をしたり関わりを持ったりしたことで友達同士の関係もさらに深まっていった。それにより、製作活動以外のことに対しても団結力が出

てきた。

- ⑪今回の活動で、教師自身も学ぶことが多くあった。今までは園児同士の意見のぶつかり合いがあると状況に応じて教師が中に入り解決していたが、園児たちだけで解決できるようになるのを見守ることの大切さを実感した。協同性の涵養のためには、最初の段階では、教師が意図的に話し合いの場を設けたり、環境づくりをしたりすることも大切である。活動を通して教師自身も楽しみながら、様々な活動に取り組み、園児相互、並びに、園児と教師間の信頼関係を深めることができた。

3. 教科活動につながる協同的な遊びと学び

文部科学省のウェブサイトの中に掲載されている「協同的な学びへのプロセスと発達の過程（イメージ）」図では、協同的な学びの経験が小学校以降の学習や生活において、物事に対する関心や学習意欲を深めるとともに、生活科・総合的な学習の時間などの集団学習の活性化などにつながっていくとしている。発達段階に応じ、教師による援助・環境構成を行い、小学校へとつなげていく

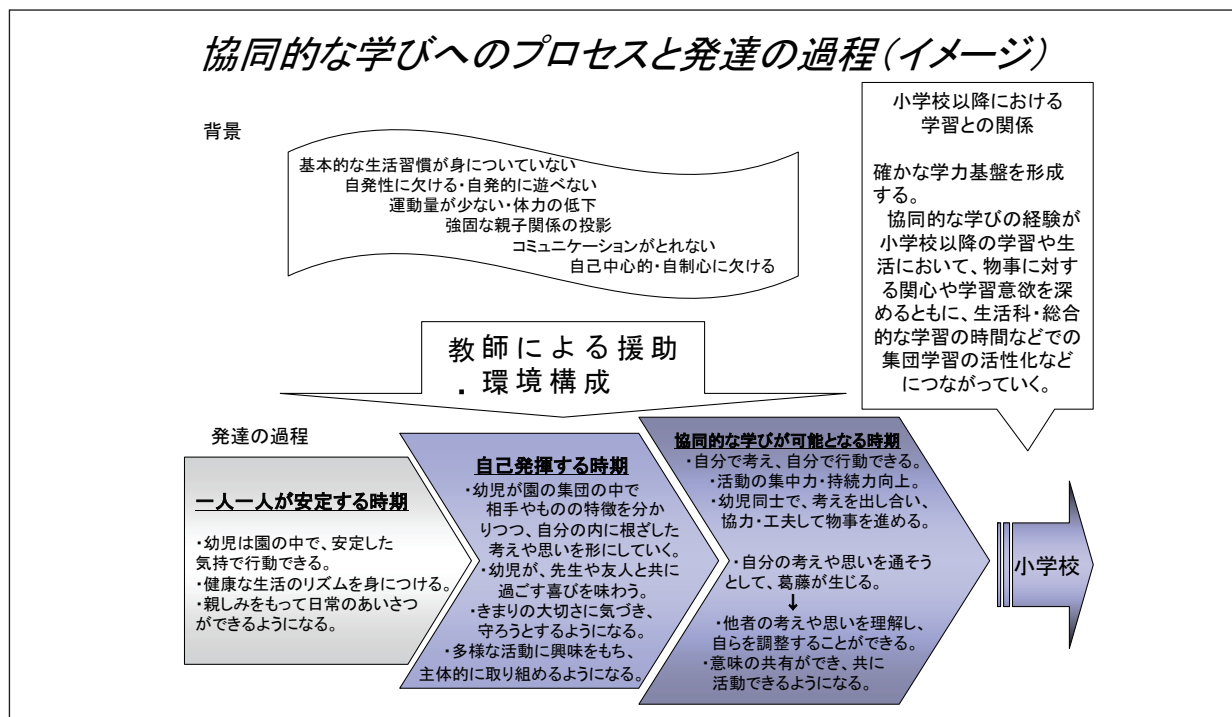


図4 協同的な学びへのプロセスと発達の過程（イメージ）

文科省のサイトより（中央教育審議会、武藤委員提出資料）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/008/siryo/04030501/002.pdf
(2011年9月30日閲覧)

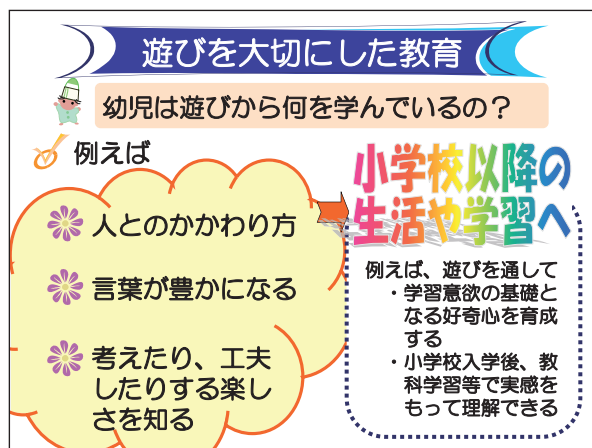


図5 遊びを大切にした教育

文部科学省初等中等教育局幼児教育課「幼稚園ってなあに～学校教育のスタート」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2009/03/16/1258023_2.pdf
(2011年9月30日閲覧)

のが重要となる。

幼稚園教育要領解説において幼稚園教育の基本に関連して重視事項として取り上げられているように、「自発的活動としての遊びは、幼児期特有の学習」であり、幼稚園における教育は「遊びを通しての総合的な指導」である。その遊びを通して、知的好奇心を育成しその「学びの芽生え」が、小学校入学後、教科学習等で「自覚的な学び」へと円滑に移行していくことが大切なのである。

ここで、A幼稚園の協同的な遊びと学びのプロセスを整理してみよう。

まず、本稿で取り上げた活動の特徴は時間をかけて取り組んでいるということである。進級によるクラス替えがあり、4歳児クラスからの継続は27名中8名とはいうものの、担任教師は継続的に子どもたちの知的探究心を鋭く捉えている。きっかけは、星の好きな園長が星について語ったことから始まる。天体への関心が高まる過程で園児からプラネタリウムへ行きたいという声があがる。その声を教師がきちんとキャッチし、プラネタリウム行きを実現させる。幼児だからといって曖昧にせず、きちんと専門家と連携して、科学的な探究心の芽生えを育てているところに本実践の意義がある。プラネタリウムでは、星の動きや既存の星座を覚えるというのではなく、「幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方にかかわる」⁽⁷⁾

ことをやる。古代人が恒星をいくつかずつ適当に組み合わせ、いろいろな形に見立てたというそのプロセスを園児たちがたどるのである。星の配置から自分たちの身近にある「傘」や「バナナ」をイメージし、園児のオリジナル星座「傘座」、「バナナ座」を考え、それを描き、それを、実際にプラネタリウムで投影してもらう、という活動にまで展開させている。そのような「知」の楽しみを知った園児たちは、次に、宇宙をテーマにした製作活動を「自発的」に行う。「協同的活動によりひとつの作品を作り上げる」経験をした園児たちは、お泊り保育等の場面でも、自発的に仲間と協力しながらものごとを推し進める力を楽しみながらつけていく。協同活動から学びの自立へ、そして精神的な自立へとつながっていく様子がみられる。

その後、3人の園児が1本の縄跳びで一緒に跳ぶことができるか挑戦、いろいろと工夫しながら結局は跳べなかったが、園児たちは自分たちでできない原因を考え、解明しようとする。その次に、オリジナル鬼ごっこ、オリジナルじゃんけんが出現する。その自分たちでルールを考え、園児同士で話し合いをし、仲間を広げ、自分たちだけで遊べるようになるのである。この創意工夫、仲間との協同作業こそ、「ひととのかかわり」「ものとのかかわり」の両側面からの小学校以降の「自覚的な学び」の基礎力なのではないだろうか。

また、オリジナルじゃんけんはまさに、遊びの中から誕生した、そして生活に密着した「知」である。幼稚園教育要領第2章ねらいおよび内容環境 3内容の取扱い(4)には、「数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること」と記載されているが、まさにそれをA幼稚園の園児たちは自分たちで創り出しているのである。鬼を決めるために、15本の指を数える、そしてそれが40本まで発展する。じゃんけんをする度に40まで繰り返し数える。「数を習得するための数の学習」ではなく、子どもにとって重要な意味をもつ鬼を決めるための「数」である。子どもたちは、

「遊び」という「日常生活」の中で、「必要感」に基づく「体験」を通して「数」の感覚を養う。しかも、大人からの意図的な注入ではなく、園児が自発的な遊びの中から「必要感」に基づいて「数」を習得しているのである。

おわりに

繰り返しになるが、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）（中央教育審議会、2005）には、「遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。」と、幼稚園等施設と小学校との連携強化の方針が述べられている。

A幼稚園の事例、すなわち、天体に対する興味から小学校以降の「生活科」や「理科」学習へ、オリジナルじゃんけんから「算数科」へ、まさに、「遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながり」を示すものがある。さらに、本事例では、天体への関心、知的探究心を図鑑等を利用して深めたり、プラネタリウム見学といった形で専門家との連携を行っている。1人で天体について調べるのではなく、共に学ぶ仲間との活動を楽しむという意味でまさに「協同的活動」である。また、「家庭でもインターネットで天体や金星探査機について調べたり、夜空を家族みんなで眺めたり、星の話がきっかけで家族の会話や団欒の時間が増え、嬉しいというお便りがたくさん寄せられた」と担任教師が言うように、園児の知的好奇心を大切に育んだ幼稚園の取り組みが家庭を育てるという機能も果たしている。

本実践から見い出されたことは、子どもの中から発せられた「やりたい」という気持ちやつぶやきを、教師が即座に受け止め、実現の方向を探ることの重要性である。集団の育ちと個人の育ちの相互作用によって子どもたちが育っていく、それには教師の援助・環境構成が重要なのである（図

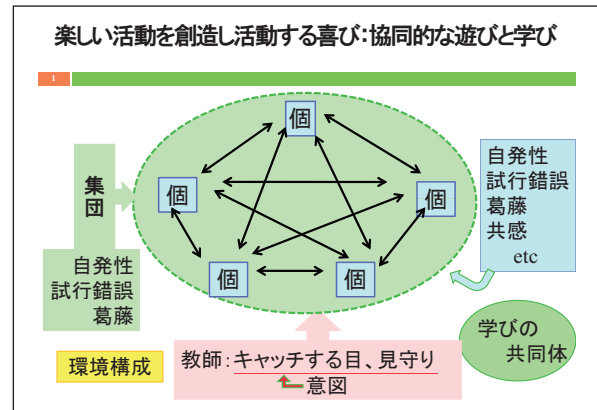


図6 楽しい活動を創造し活動する喜び：協同的な遊びと学び

6 参照)。

【注】

- (1) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」より
- (2) 林幸恵（2009）『『伝えあいひびきあう』関係を育む協同的な学びの実践（5歳児『恐竜ランドを作ろう』』『福井大学教育実践研究』（33）
- (3) 小林功 他（2005）「協同的な活動の模索」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第28号
- (4) 文部科学省のHPより
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1267275.htm（2011年9月3日閲覧）
- (5) 三石ゆか（2008）「協同的な学びを育てる保育の在り方」『平成19年度 研究集録』第15号、奈良県立教育研究所
- (6) 中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—（答申）」（平成17年1月28日）
- (7) 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』32頁、フレーベル館

【付記】

本稿は、第25回全日本私立幼稚園連合会関東地区教員研修千葉大会（於ホテルニューオオタニ幕張、2010年8月18日）フォーラム3 問題提起I「共有した体験から協同的活動へ～天体への関心の高まりから」および（財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構第2回幼児教育実践学会（於追手門学院小学校、2011年8月21日）口頭発

表Ⅱ「オリジナル鬼ごっこで遊ぶまで～5歳児の協同的な遊びと学び～」で行った発表を論文としてまとめたものである。山梨県私立幼稚園協会の関係者はじめ多くの方々に多大なご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。

The Smooth Articulation of Pre-School Education and Elementary School Education: The Value of Play and Learning in a Cooperative Manner at Kindergarten before Transferring to Elementary School

YAMADA Chiaki¹⁾, SHIMIZU Aki²⁾, AIHARA Yumi³⁾

Abstract

The contents of cooperative play and learning in infancy should be reexamined for the smooth articulation of pre-school education and elementary school education. Therefore, we took two cases from a private kindergarten (A) in Yamanashi Prefecture: 1) From Shared Experience to Cooperative Activities: Through Increasing Interest in Astronomical Bodies; 2) Up to Playing Their Own Version of Tag or *Onigokko*: Cooperative Play and Learning by Five-Year-Olds. We analyzed the process from cooperative activities to independence in learning and the beginning of mental independence.

The results show that it is important for teachers to pick up on students' curiosity and to immediately investigate, in order to realize children's interests, and improve the connection between learning through play in infancy and learning from textbooks after entering elementary school. It was revealed that with teachers' help; group and personal interactions together with the appropriate formation of the learning environment are important for children's development.

1) Yamanashi Prefectural University

2) Shiobe Kindergarten

2) Shiobe Kindergarten

Key words : Cooperation of Kindergarten and Elementary School Education, Play and Learning in a Cooperative Manner, Intellectual Curiosity, a Spirit of Inquiry